



[令和 2 年 8 月 12 日 定例会発表要旨]

手稲の下水道の歴史

道路工業株式会社（元 札幌市職員） 高松 康 廣 氏
札幌市下水道河川局下水道計画課 計画係長 前崎 巧 氏

本日は、下水道に関する説明の場をいただきありがとうございます。

下水道は、地下深くにあって目に見えないこともあり、あまり関心を持ってもらえない施設です。しかし皆さんの生活を縁の下で支える大事な施設ですので、手稲区の下水道の歴史を通じて、少しでも理解を深めていただければ、幸いに思います。

現在の手稲区内の計画的な下水道整備は、1969（昭和 44）年に、手稲本町地区を下水道の事業計画区域としたことに始まります。

この下水道整備の契機となったのが、1972（昭和 47）年の冬季オリンピックの札幌開催です。札幌市が、冬季オリンピックの誘致に動き出した 1961（昭和 36）年に、当時の原田札幌市長が定例議会の中で、「広域都市の達成、冬季オリンピックの招致のため、手稲町との合併を目指したい」と発言していましたし、菱輪手稲町長も、1963（昭和 38）年に、町政執行方針の中で「工業地帯が完成するには札幌との合併が早道であり、町民も原則として賛成している」と発言していました。こうした経緯があった中、1966（昭和 41）年に 6 年後の冬季オリンピックの札幌開催が決定すると、オリンピック開催に向けて、手稲の下水道の整備は動き出していきます。

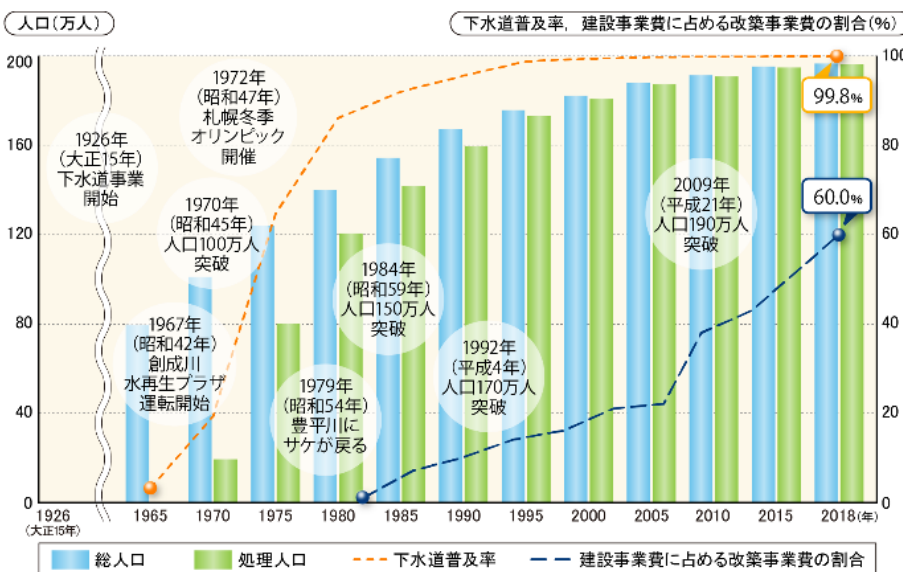
1967（昭和 42）年には手稲町と札幌市が合併し、1969（昭和 44）年には、人口が集中し環境衛生の悪化が進んでいた手稲本町地区を下水道の事業計画区域として決めました。さらに、1971（昭和 46）年には、前田地区などを事業計画区域に追加するとともに、手稲中継ポンプ場、手稲処理場の整備に関する認可を取得



前崎氏 高松氏

しています。

手稲区内には、発寒川や新川を除くと小河川が多く、南部地区の急勾配に比べて、流末の北部地区は緩勾配の平坦地であるため、下水を集約して排水したほうが、下水道管の埋設の深さがあまり深くならず、経済的に有利であることから、下水の排除方式としては、汚水と雨水を同じ管路で流す合流式を採用しています。



札幌の下水道の普及



手稲水再生プラザ

—札幌市下水道河川局発行『札幌市の下水道』より—

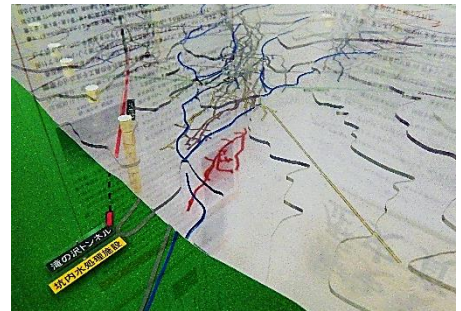
オリンピックの開催を契機に、札幌市の下水道は人口の増加に合わせ集中的に整備され、手稲でも、下水道の事業計画区域が拡大していきます。1973(昭和48)年には富丘地区、1974(昭和49)年には新発寒や西宮の沢地区、1975(昭和50)年には稲穂、金山、星置、山口地区、さらに2003(平成15)年には明日風地区が、事業計画区域に追加されました。

処理施設については、1974(昭和49)年に手稲中継ポンプ場、そして1978(昭和53)年に手稲処理場の運転が開始され、下水の処理が始まりました。「水再生プラザ」という名称は、「処理場」に替わる名称を市民に募り、より広く市民の皆さんに利用・活用される下水道でありたいという思いを含め、2007(平成19)年より使用しています。このように整備を進めた結果、2020(令和2)年4月現在、全市の普及率は99.8%、手稲区は99.9%となりました。整備した下水道管の延長は全市で8,291.6km、そのうち手稲区は578.8km、下水道の処理面積は全市で24,781ha、そのうち手稲区は2,204haとなっています。こうした下水道の普及により、今ではほとんどの市民が下水道を利用できるようになり、また大雨に対する市街地の浸水対策も進みました。

しかし一方で、設置から数十年経過した施設が増え、下水道施設の老朽化が大きな課題となっています。今後は、皆さんの生活を支える大事な下水道を守り、次の世代にしっかりとつないでいくことを目指し、日々の維持管理や更新事業を進めていきたいと思っておりますので、引き続き、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



★「手稲鉱山」の模型が区役所1階へ移動 これまで手稲区役所3階に置かれていた「手稲鉱山」の坑道模型と年表(いずれも三菱マテリアル株式会社提供)が、手稲区市民部のご配慮で1階の情報提供室の「手稲歴史資料展示コーナー」へ移され、気軽に見学できるようになりました。現在公開中のパネル『手稲最大の産業遺産 金が採れたヤマ「手稲鉱山」』や鉱物の展示と併せて、「手稲鉱山」についての知見をより深められてはいかがでしょうか。ぜひ足をお運びください。



精巧な坑道の模型

★札幌あすかぜ高校の取材に協力 道立北海道札幌あすかぜ高校の放送局から「私たちの住む地域に関する話題を取りあげたい」と、手稲郷土史研究会へ協力の依頼がありました。高文連の放送コンテンツへ向けて、「手稲鉱山」をテーマに作品を制作したいとのこと。郷土の歴史遺産に関心を持って旺盛な意欲のもと行動するその姿に共感し、できるだけのお手伝いをしようと、永井道允会長と林俊一事務局長が対応しました。次代を担う高校生たちの健闘を祈らずにいられません。

次回定例会 ⇒ 発表内容「シベリア抑留—体験者・西野忠士翁に聴く—」／建部奈津子氏(シベリア抑留体験を語る会 札幌)
10月14日(水) 18:15~／手稲区民センター3階 視聴覚室／会員でない方の聴講は申し込みが必要

手稲郷土史研究会会報「郷土史ていね」第152号 令和2年9月9日発行 発行責任者:永井道允(手稲郷土史研究会 会長) 編集:菅原純子・佐々木光男
❖〒060-0808 札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ 2階 札幌市市民活動サポートセンター レターケースNo. 277 手稲郷土史研究会
❖メールアドレス kyoudoshi_teine2005@yahoo.co.jp